

と漂ひ初めて海やうやく暗く、空やうやく暮れなすまむとするこの宮津情緒の底で我等が、「さ、はうき」でぐらげをつゝいてゐるのは何んと奇妙なコントラントか。

夜、街を歩く。灯影美しい街。繪葉書など求む。

(十四日) 晴天や、雨模様。海はゆたかな朝靄を罩めたまんま未だ見ざめぬ形だった。けふ行く天橋、昨日より少しくしりぞいてかすむ。六時十分發動機船で宮津出發。海上は云ひ得ぬ磯めいた香りで満ちてゐた。その中を朝風が吹く。天橋着同四十分。かの白砂青松の名は橋立に於て至當である。青すんだ水、洗ひ清められ磨かれ砾がれた數知れぬ白砂、それを點綴するに大松樹を以てし、曉冷の氣爽々、頭をふき貫く。

たらたら坂、石の坂、急道などの成相山へ登る。行くこと二三丁、宮「國幣中社籠神社」と云ふ。一揖して過丹がところどころを咲いて季節おくれをほのめかしてゐた。あへぎあへぎ登りつゝ時に松籟を聴いて頭を輕るめ又遠望、輿謝の海及び天橋を瞰下して足を運ぶこと數丁、傘松と云ふのがある。小坦な地に出る。掛茶

屋小茅屋等があつて、これより例の「股のぞき」をやるのだ相な。

上松先生のすゝめられるまゝ實行してみたが別に感心するやうな心配はなかつた。況してやバノラマ云々などゝは自分には到底思ひもよらぬこと。それより九十九折の白すんだ山坂を登つて成相山の小峯を極めた。これで日本三景の一、天の橋立の絶佳景勝は、多年の思はく通り眼底に改めて印象となつて收められた譯だ。下山して先刻來た途に出、一部分ポンポン小蒸氣に乗る。これ絶ゆず輿謝海をめぐる可愛らしい定期蒸氣船とでも云ふべきか。玻璃の砸きすました面のやうな輿謝海上に、一抹と雲煙と、一路の小波を立て後ろにやりつゝ宮津に着く。空甚だ険惡な曇り工合。時に九時十分。成相山麓より歩行したる一部分を待ち、併せて宮津發の十一時汽車で出發。舞鶴驛着十二時十分。このさぶれた驛の待合で小閑小憩を得て、さて手持無沙汰で仕様がない。それを慰するかのやうに折からの曇天より雨が落ちてきた。舞鶴驛發、午後一時卅九分。降雨の二筋三筋が雨にゆられて、車窓の硝子に撲りつけられたりした。その度毎に外の景色は雨中に、うる

めいてひちやびちや鍼を依せたり延びたり縮んだりした。敦賀着、四時十五分。雨いよいよ地ぶりとなる。

柳ヶ瀬のトンネルも三分四十五秒で無事通過。窓外の景色は泣き出したやうで一切駄目となつた。車中は雑談に賑ひ賑ふ。

長濱を過ぎ米原を通るに、早や雨の日の日脚は早く、四邊はやうやく薄暮の黯色に嫋々とさみしくなつてきた暮雨蕭々。車窓はいたく冷いた。車内も灯した。そして六時四十五分この春季旅行を終へて彦根驛着。皆疲労を溜めた足どりで、ぬかるみの道を拾ひ歩き乍らさてまた今日昨日の二日を懐しく追憶の中に甦らせたことだ。

橋立紀行

居長英三郎

此等の句は、私が修學旅行に橋立方面へ行つた時のものであるが、中には隨分説明的なものや、無理をしたものも少くないので、諸君の前へ公然と出す事を少々憚るべきであるのに、今日厚ヶ間敷も諸君の目の前へ出した事に就いて、私は偏に諸君の御海容を希ふ者である。

出發は夜中である。いざ家を出ようとする時、私は心の中に言ひ知れぬ寂しさと不安を感じた。氣の抜けたやうな汽車の笛がぼうーと鳴る。
物失ひし如き心や旅出哉。
汽車には他校の生徒も乗込んで居る。汽車の中で寝た経験の乏しい私は、眠らうとしても眠られぬ。
安からぬ心や旅の汽車に寝て。
搖れつ走る汽車の中なる眠哉。
汽車は闇の中をひた走りに走つて、京都へ着いた時は、夜も漸く明けなれる頃である。プラットに降り始めて「お早う」を言ひ相ふ者が多い。

ほのぐと白みて肌のうすら寒き。
屋根は霧に眠りて朝日あかくと。
祝へかし我が旅立ちを朝日影。
京都を去ると、やがて保津の絶景を眺める。隧道の多いこと。兩岸の山も美しい。
岩を噛む保津の流の碧さかな。

若葉茂る山の幾重や保津のうね。

若葉若葉はつくりと山につゝじ崩ゆ。

隧道の多さや若葉青き山。

此の邊は山の中で、日も當らぬ窪地さへ田にしてある。

人やせて山陰に田を植うる家。

舞鶴で汽車を外して、要港部迄一里半を徒步で行く路は廣くてよい。隧道がある。其處が一番高い。要港では暑くて困つた。

坦々と一里の道のあへざ哉。

鐵を打つ暑さや心既に失き。

船渠深く水兵得意げに語る。

宮津へ着く少し前、汽車は海岸を走る。白い砂が美しい。灣になつて居る。

鳥止る岩や汀に波高し。

宮津へは少し早く着けた。宿では澤山のくらげを大勢掛けで殺生した。橋立が遠く幽に望める。

夜は宮津の町を歩いた。少し明るい所だと思つたら酒のむ家のつゝき町でびつくりして後もどりした。宿に歸つても皆が初旅の喜びて悠々と眠らさぬ。

朝早く宿を立ち發動機船で橋立へ行く。先生三人が

汽船に遅れられたなんか珍だつた。

くらげぐふわりくと流れける。

舞鶴城といつても名ばかりの石垣と池があるのみ。

橋立通つて宮津へ歸る。道はよい。

芭蕉の碑のそいて橋立通りけり。

折々に見下す興謝の狭さ哉。

股のぞき平凡々と橋立よ。

橋立通つて宮津へ歸る。道はよい。

芭蕉の碑のそいて橋立通りけり。

城跡や時雨るゝ中を行きにけり。

歸りは元氣も無く平凡な景に意氣消沈。

雨にかすむ原や荒れける北國路。（をはり）

第一學年旅行記

岡庭 博

五月十四日我等一年生一同西江洲に旅行せり。八時棧橋へ集合、日吉丸に乗船す。船は彦根を後にして一路竹生島に向ふ。天氣晴朗にして波おだやかなり。

十時過竹生島着、直ちに上陸し神社に詣づ。藤下先

木村三雄

待ちに待つた日は來た。今日は西江洲に名所古跡を見んとて我等は朝早くから波止場に急いだ。

十時半再び乗船島を一週す。十分を用せり。島附近の海面は青々として見るからに深きをおぼゆ。竹生島を出でしより船は大いに動搖す。一同弱りぬ。間もなく波も静まりはるかに、みぞり丸の通るを望む。一同元氣回復し合唱する者あり、船中に繪葉書地圖を買ふ者あり、又スタンプをハンカチにおす者もありき。

十一時半舟木へ上陸す。十二時日吉神社に詣で、境内にて晝食す。

十二時半日吉神社を出發藤樹神社に向ふ二時半神社に詣づ。それより藤樹書院に至り休息す。二時半出發近藤重藏の墓所に詣づ。途中雨に遭ひ、一同苦しむ。列全くくづれ三々五々たり。

墓所にて山本先生の近藤重藏に關する講話あり、四時大溝港にて日吉丸に乗船し彦根に向ふ。五時頃白石附近を通過す。續いて多景島を見る。今「誓の御柱」を建設中なり。五時半彦根港に着雨を冒して歸宅せり。

島を一廻りすると言はれた。段々廻つて行くと洞の如き穴が幾つも前にあらはれた。湖上はるかに存在するこの一孤島は波の音の他聞ゆるものとてはない。もう大分西江洲が見はじめた、しばらくして船は棧橋についた。上陸して長いだらくした道を行くことでうやくしくひざまづいた。

十五町で藤樹神社に着いた。塵一本もない白砂をふんそれから先生の墓に詣で藤樹遺愛の藤を見書院に至り室を拜観したが先生の衣類などを見ては又一入の觀に打たれた。

こゝを出發して大溝に至りこゝで乗船して西江洲に別

を着けた。そして五時半頃彦根に歸着した。



(黒い猫)

大鳥居季彦

黒い猫が胸の上を飛びこむ

ほのぐと

海の薄明

岸本幸二郎

明けて行く海の薄明

昨夜の夢も

今はほのかに、

静かに輝く海の面。

水平の彼方より

蒼白くうるむ兎

かぎりなき波間にとけて

静かなる春の海

心もうるむ海の曉。

不可思議なる天地のこゝろ

幽妙なる海の想

静かに眠る浮島。

一面にこむる海の恍惚

太陽も登らぬ

なつかしの海の薄明

快き春の海。「房總半島廻遊中」

飛びこむる毎にこちらを凝視める
追ひ拂はふとしても

その眼ざしに思はずも
たぢろく。

おのが恐かさに
闇を見つめては涙を流す

みすからいとほしさに
闇を見つめて 祈れど

あゝ傷つきし心よ 汚れに染みしこの身よ。
まがつ猫よ
かたく眼をつむれど
らんらんと

やみの中に瞳をすりて
重く壓された胸の上を
又しても
黒い猫は飛びこむる。

べん／＼草

岸本幸二郎

古い瓦屋根のてんべんに

秋風に吹かれながら

唯一本淋しさうに立つてゐる

べんべん草。

眼瞼の奥に

何處までも青い大空を

小さい渡り鳥の群が

鳴きながら過ぎ行く時

お前はいつも

仰向いでじつと其の影を見送る。

土蔵の上を

吹いて行く秋の風が

お前の細い長い身体をなでる時

お前はいつもやら／＼ご

おとなしくからだをなびかせる

淋しいとも言はずおとなしう
立つてゐる一本のべん／＼草。

追憶　廣瀬義景

なつかしい搖籃の唄の
温い抱擁

それを時の流れが
もう十何年の昔の夢としてしまつた
年は更行く

涙ぐましい日が續く
追憶よ！なつかしい追憶よ！
もう一度

たゞの一度
昔の夢を返してくれ!!

恐　怖

廣瀬義景

あゝ、衰へ切つた哀れな老年よ、
何一つとてない
血の氣の失せた

瘦せ果てた老年
眞白な額は何所へ行つたのだ

輝く黒髪は
そして

しなやかな肩
汝が愛のために備へて置いたものは
何處へ行つて了つたのだ
此の短い腕と云ひ
此の曲がり始めた肩と云ひ
それから此の胸

此の腰、
此の手足
ひからび切つて臍脇の様に班になつて居る
だが然し
君も或る日はかう云ふ風になる

—此の身震ひする程な有様になる
あゝ秀美の女王よ！
最後の聖餐を終へれば
君は早晚かう云ふ姿になる

君が草と花との下に横る日になれば
君は骨に交つて崩れて行く
返事　河村勇哲

Yよ！有難う。

そして

私は神様の御名によつて、
君に感謝致します。有難う！

Yよ！私は君の生命に生きて居るのである。
君の御手紙は、
すばらしく充實して居ます。

Yよ！私はこの自分の心臓を
半分さいて君にあげよう、
君の充實した御手紙の返禮に！

一九二五。九。一三

嘆き　河村勇哲

嘲れ、嘲れ、血を好む人の心よ。
嘲れ、嘲れ、血を吐いても戦ふ人間の闘士よ。

嘲れ、あざけれ、總べては惡なのだ。
君達は他人に對する一切の敵意を忘れよ。
個人對總ての戦。

苛酷な容赦のない生存競争。

それがなぜ我々の世界に於ける
唯一の原則であらねばならんか？

「過去」　河村勇哲

私は静かに目を閉ぢた。
そして死んだ過去を探ろうとした。

勿論それは恐ろしい事ではあるが。
しかし幸に私は、

死んだ過去を見ることも出来なかつた。
見る事も活かす事も出来なかつた。

何故ならば過去はすべて
神に捧げておいたから。　一九二五、八、三一

花

須山 清太郎

来る日も来る日も次の日も

樂園に遊ぶ様な日が續く

自分は何と云ふ幸福な人間だらう

自分は決して感謝を忘れてはならない

御佛に感謝する其の事は

自分の生活をより美化するにちがひない

自分は此れ以上の幸をもどめてはならない

来る日も来る日も次の日も

楽しい感謝の日は續く

おお自分は何と云ふ幸福な人間だらう

自分は現在の日と心を

どんな時でも忘れてはならない

そして又自分は永遠に忘れまい

同じく此の世に生をうけながら

病床にある人災難に遇へる人々を

かう思ふ時自分の心は感激に充されてそしてその

感激が涙となつて頬を流れる

朝な夕なに
やさしの君に愛されて
文机飾りし
野の菊よ！昨日は路上にすてられて
道行く人の足の下
明日は何に變るらん。

鼠

あの鼠なんとはかない運命を以て
目出度のこの世に生れたものが。己が身よりもなほ太い
太い繩もてくくられて幼い童の手に提げられて
たゞかれ振られ朝の町をおまはりさんの居られる方へ
いやおうなしにつれられて行く
なんとあはれなあの鼠飄然と家に歸つてきた
だけぞ精神だけはすつかりつかれきつて
そしてより一層憂鬱な顔をして

對照

ある立派な葬式があつた
誰も彼もみんな祭壇の前で
まぶたを真赤にはらしてゐた
が併したつた獨りの隠亡のみは
人々の後の方で小さくなつて
そして

大きな大きな欠伸を三つした

男が泣く時

知田 義一

思ひ出多きは過去である

己の辿つた道程

それは餘りに悲しかつた

初めて大きな瞳を開いた時

知る人の誰彼と餘りに隔りが出來てゐた、

もしも己の姿を視る事が出來たら
恐らく彼は目をそむけたであらう

然し彼は餘りに疲れ切つて居た

或夜一人で泣いた——そして涙の眼で
己の荒んだ、疲れ切つた體を見詰た

朝——夕

兒玉 琢爾

なんとなく歩いて見たかつた
そして古ぼけたマントを冠つて外出した

朝とおんなじ様な格好をして

夕

詩 藻

「水淀みて、」
北村彌一郎壯嚴なる春日
麗らかにボブラの野邊を上る。

雪が降つてゐる。

淡墨色の空から。

雀が電線の上で

みんな同じやうな外套を着て、
あつちむいてはお話

こつちむいてはおしゃべり、
外套に亂れる雪を

ほろほろとゆすりながら。

雪が止んだ。

青い空が見えてゐる。

雀が澤山集つて

あちらの木でも

こちらの木でも

學藝會を始めた。

歌つたり話したり。

さんだり跳ねたり。

明るい空は

絹絲のやうな光線がゆれてゐる。

淡い星空

北村彌一郎

淋しい夕が訪れて來た。

縣廳の白ベンキが薄紫色に冴にてゐる
庭のダリヤの花は散つて

静かに帳がせまつて來る。

私は今淋しい心地におそはれつゝ

静かな夕を窓越しに見た。

おゝ早や空には星が出てゐる

随分と早く日が暮れるようになつた。

も早や隣家は戸を開ぢて

庭の垣根には朝顔のしをれてゐるのが淡く見えて

遠くの氣笛は何時かを報じ、

鳥は鳴きを静めて森に歸つて行く

あゝ静かな夕。

こんな淋しい夕には小鳥は森で泣いてゐるだらう
森の神はその聲をどんなに聞くだらう

さらさらその上を泳いでゐる

「お家の子たちは達者か? —

「うんにや、亂暴で亂暴で

俺の耳を引っぱつたり、もう

おれの鼻を振つたりよ」

垣越しの會話がひそひそと

この、九月めいた風に

運ばれては散り 散る。

桐下の蟻の行列、夏の穹窿、

(夏は蘭どきを過ぎたさみしさだな。)

しなだれた血のカンナよ、

肅しやかな意匠の秋海棠よ

わたしたちの本能は

きらびやかな色彩の圖案を

人間生死間の靈氣を賞づるこゝろとを

季節のものに含ませて、

一坪、二坪の庭に飾るのだ。

九月の風

高祖

保

おゝも早や暮れてしまつた
中天には黒く縣廳の尖塔が突立つてゐる。
あつ、讃美歌が聞てるじやないか
おゝキリストの顔が浮んで来るやうだ。

心淋しい夕、

ほろ／＼と涙でも出さうな夕。

何故こんなに淋しくなるのだらう?

私のなくなつた母さんの顔が見てるやうだ
次には此の間返らぬ旅についた友の顔が
あ、亦キリストの面影が。

ほんとに静かになつた
今までの波も止んでしまひ、
風がさゝやくやうに梢を吹くばかり。
秋近い庭の風が、

(秋初落寞感の戯遊の一場か。——)

惱亂の色どり、ほの黄、さめざめと
黒と灰色にけぶる歡樂の魔の蝴蝶たち、
おゝ牧歌的な風の……
こんなさみしさを知れ！

半びらきの硝子窓。

繪畫を載せたハンモックの靜けさ、
ピアノのキイに躍る感情的聽覺、
びかびかな青いろの反射光！。
文化住宅の情景の端くれ
そこを秋めいた風が波だつ

『チロ、チロ……チロ！』

どうどう寂しい秋蟲が出たな、
渴望の美を地上に探る時は經つ、
こうもさみしい九月の陽が庭におち
ひんやりした初秋の風を聞く……

「さらさらさらり」と。

わたしたちは本當に静かだ！

發火演習 中川英一

和やかに高く晴れた空
弱々しい秋の陽の光も

此處山峽の里には

さん／＼と降りそゝいで

春が甦つたやうな暖かさ

一面に紅葉した山の木々

路ばたの所々には

葉の失せた柿の木に

頬ずれをしてみたい程銀張つた熟柿が

撓んだ細い枝先にたれてゐる

聲するものは

たゞ折々鳴く山腹の百舌と農家の鶴

併しその聲は向ひの山にこだまして

此の平和な山峽を

何時迄ものぞかに餘韻は流れた

秋も暮れ近き日

私達はいそ／＼と山裾の細路を辿つた
坂を上り下り或ひは丸木橋を渡つて。

と、耳を劈く銃聲……二發三發
續いて起る銃聲喊聲の轟き

あゝ戰鬪開始

遙か山裾にうごめく敵兵

それを追撃して行く我が先鋒

「散れ！」

我等は忽ち芒の中に散兵線を敷いて
第一戰隊の後に續く

硝煙は狭い山里に罩め
銃聲は峠間を抜け出でて

高い青空に轟く

撃つ／＼我は進め

あゝ將に白兵戰か！

そよ吹く風もはたと止んだ

アラビヤの夜

中川英一

音もなく湧き出づる清水に
旅人も駱駝もかつてを醫し
青色深き森かげに
沙漠の天地が暮るゝ頃

遠き彼方に
あこがれのメツカの町を夢みつゝ、

旅人も駱駝も

静に祈りを捧げつゝ臥しぬ

漠々たる沙漠のオアシスのほどり——

も　　す

早稻田

刈る頃にや
あれ聞きやしやんせ

山裾を

もすがもすが
鳴いて通る。

日本の曙

坂本至誠

苦い曙がくる！

苦い沙風が頭を搏つ！

渦巻の燃にあがるただなかに
その静かな中心に

日本は在る！

自らの手をもつて曙を
自らの手をもつて嵐を
おしひらく力は吾等にある！

眠るときでない、人々よ、

いまはうす暗い朝だ、起きいでて

おまへの額に汗をながし、
おまへの拳に力をこめ、

おまへの畝を耕やすこきだ。
おまへの眼を空にむけて

おまへの手を地におくときだ。

おまへの内なる力を

輝かしい外光にさし出し、
おまへの立派な靈をまことに生かす時だ！

おまへの眼の前に睡る亞細亞、
おまへの見張りをする亞米利加、

おまへをそねむ隣人

おまへを疑ふ異邦の人、

ああ、おまへの負ふべき十字架は
かずかぎりなくある！ おまへの
あらんかぎりの聲に叫んでも

まだ足らぬ證明の言葉がある！

その實證をこそさし示せ！

日に溶ける雪解の水のやうに

堰を越にてかなたに押し流がす一つの力！

その如く日本を

美と眞實の日本を

おののの手にうち撒けよ、彼方に！

改造の曙に

ふたたびつくり直す世界に

ちつともたしかな礎を、

もつと新らしき力の一つを

さし出せよ！

いまは潤歩するとき！ 力の時！

もの怯ぢして歩むときでない！

まつしぐらに「時」の柵をも越えて

暗い道のかなたに

確かな歩道を示す時！

幻影と夜霧を搔き割つて吾らの

曙をさし出すとき！

▽　▽　▽

苦い汐風が顔をうつ！
渦巻の燃にあがるたゞなかに
その静かな中心に、いま、
日本は在る！

蟬

大島 善太郎

バーッと太陽が輝いた、
夏の静かな朝に。
草木は露に湿つてゐる。

一匹の蟬が静かな足ざりで、
大木を攀ぢて行く、
そして今殻を脱け出たばかりだ。

五色の透明な美しい翅を、
夏の太陽に浴せて、
清い眼を光らしながら、
満足そうに呼吸をして居る

長い長い間暗黒の世界を

淋しくさまようた。
苦痛と不平に堪へて、
泣きながら過して來た。

暫くしてジリジリと、
美しい透明な翅が、
伸び擴つて來た。

平和な日の光を受けた歡びと、
自由な天地を見た喜びで、
蟬は一人でに、
美しい緑の木陰へ飛び去つた。
音も立てずに――

あとには空殻が、
ばかんと又悲しそうに、
木につかまつてゐる。



「眞午の湖。」

宮川 卯衛門

くつきり澄んで來た。
水に沈める真砂が光る。

水平線の彼方に
只一つ白帆が浮んでゐる。
動かうともしない。
獨り點として浮んでゐる。

漣が立つて來た。
岸邊の蘆が軽くうねる。
あの水鳥も去つた。
船も動いた。

後の方で午のサイレンが鳴る。

生の争ひ

冷たい感じのした
或る初秋の日。
郊外のさある小路で
醜い争ひが續けられた。

それは「生の争ひ」である。
二人の闘士は
「生」！「生」！の爲に
眞剣な争ひを續けてゐるのだ。

午の糧？

一しきり荒された
砂濱の水が

私はこれを見た瞬間、人の世が急に冷たくなつた様に覺えた。

二人は「自己の生」には忠實である。

而しその結びにて

勝ち得た者の

狂喜！凱歌！歡樂！

敗れし者の

落膽！暗黒！破滅！

それはどんなに

惨めだらう。

私達も何時かは

争ひの時が來るのだ。

私は「争ひ」を欲しない。

そしてこの世の中から

その「争ひ」をほうり出したい。

(完)

悲寂の詩聖よ、

汝の：汝の……

私は心から尊く思ふ。

(完)

湯にて

上田善雄

むらむらと立上る湯氣、

こゝちよき湯舟にひたりてあれば

おゝ萬難よ來らば來れ
われ汝と戰はん
おゝ萬苦よ、誘惑よ
來らば來れ
われ汝と戰はん。

心の奥底にひそみたる月桂樹は
如何なる誘惑をも物させず
さんさんと一きわ強く
旭光はかがやきぬ。

夏

大谷小平治

あゝ屋根の瓦が動いてゐる。
私は少なからず驚いて
またたきせず永い間見つめてゐる。
何の事だ。

かげろうなのだ。

手の平まで油じんでゐる。
にはかに梢に青い波が立つ

旭光

上田善雄

さんさんと

生命の若き光りを今し

朝日は白壁になつ

燃ゆるがごとき

青春の血もてるわが心は

今し希望に満てる旭光を仰ぎし刹那
言ひ知れぬ心強き感に打たれぬ。

悲寂ご秋

宮川卯衛門

「悲寂」

宗教的な意氣深き語だ。
悲寂は人生のシンボルである。

秋の創造するその

「悲寂」

それは詩聖だ。
偉大なる詩聖だ。

秋を歌へる、

悲寂の詩聖よ、

汝の：汝の……

私は心から尊く思ふ。

(完)

湯にて

上田善雄

こゝちよき湯舟にひたりてあれば

あたゝかき心の薰り

はつ夏の今宵ぞ

長閑なるわが心。

このしすもりし我が心

あらゆる想を離れ

あらゆる事を超絶す

まなこつぶりし

わがこの刹那の心ぞ

永久にありがたき心地こそすれ。

旭光

上田善雄

さんさんと

生命の若き光りを今し

朝日は白壁になつ

燃ゆるがごとき

青春の血もてるわが心は

今し希望に満てる旭光を仰ぎし刹那
言ひ知れぬ心強き感に打たれぬ。

東の方より西の方へ。
遠雷のひびき、
夕立は逃げてしまつた。

生れたままの姿で

新聞を見てゐる。

避暑、海水浴、

果ては氷、扇風機の廣告。
やつぱり世は夏なのだ。

初秋 大谷 小平治

油蟬はヒグランシに代つてゐる。
庭のすみが賑ぎやかになつてゐる。

でも、

涼しげな虫の聲だ。

「ナス」「生瓜」とだるげな、
物賣りの聲が、

「青葉」や「小いも」と代つて
そして如何にも力ありげにひやいて來る。

青き空。澄渡りたる、
我が理想。我が前途、

童謡

朝顔

朝顔のバラソル開いた。

赤白青とそれくの

開いたバラソル朝顔が
夢の床から抜けて出た

やがてお日様お顔が見たりや
はづかしさうにおつむを下げて、
そして朝顔バラソルしめる

おつかひ

私は村へおつかひに
通つて私しやあの村へ、
がアと鳥が鳴きました。

夕日は落ちたまだ道遠い
足取重く涙をためて
野道を通れば狐がこはい。

私は飛んで行きたい
あの山の麓へ、
其處には幸福の泉が!!
自由の鐘が!!

私は飛んで行きたい
小鳥となつて、
幸福の泉をなめに
自由の鐘をつきに、

嵐は吹く、波はゆれる
行かう波の上を

嵐と戦つて、あの山の麓に。
自由の鐘の聞ゆる處に。

動くもの凡てが白かつた町に
黒い點綴が盛んに動き出した

水屋の旗も

何だか物淋しい。

町の辻

山口彌平

木枯寒き町角に
ぼろを被つた兄弟が

哀れな姿で泣いて居た。

「兄さん僕は死に度い」と
兄の破れた袖を引き、

地上に坐つてわめき泣く。

兄は弟をかばひつゝ。

裏の畠路に消えて行く。

小雪まじつて北風の

吹く音もわびし町の辻。

空、

青き空。澄渡りたる、

我が理想。我が前途、

童謡

朝顔

朝顔のバラソル開いた。

赤白青とそれくの

開いたバラソル朝顔が
夢の床から抜けて出た

やがてお日様お顔が見たりや
はづかしさうにおつむを下げて、
そして朝顔バラソルしめる

おつかひ

私は村へおつかひに
通つて私しやあの村へ、
がアと鳥が鳴きました。

夕日は落ちたまだ道遠い
足取重く涙をためて
野道を通れば狐がこはい。

私は飛んで行きたい
あの山の麓へ、
其處には幸福の泉が!!
自由の鐘が!!



和歌

大谷伍平

短歌 朝顔 木村謙次
水やりて縁に腰かけ朝顔の
棚見てあれば朝の静けし。
ころなく手にふれて見し朝顔の
花より露のほろくと散る。

昔をば思ふにいともよき今宵星高と輝きてあり。
愚にも昔をしのぶ子となりて今宵寂しくもの思ひする。

秋

はら／＼と音たてゝ散る植込の残りすくな楓の葉かな。

來ぬ友を待ちつゝ更かす秋の夜は月のみまろく浮いて
明るし。

春の島

波よする岸邊に立ちてながむれば綠の島々見ゆかくれ
する。

冬の景

野社の杉の木立のあひまよりま白くつもる雪の見ゆ。

秋の夜更けの廣き街路かな。
すて置きし林檎の皮に蟲の來て
いみじく唄ふ秋の訪れ。

折にふれて 山岸巖

やがて散る山吹の匂ふ悲しさは
散りて結ばぬ花なればこそ

暮れぬれど宿かす人もなき峯の
花に家路を忘れるかな

華かに笑める面にふどうかぶ

暗きかけこそ我心かな
荒し吹き折りにし櫻の散り行けば

淋しき心や秋に似てけり
憎まれて抜きすてられしこ草も

夕月のはれわたりては葉がくれに
殘れる花も見ゆる頃哉

川風に吹き送られて飛ぶ螢

草葉の露にいこひ輝るらん

(一九二五 晚夏)

ぬ。

水郷 北村彌一郎

谷川に細き光りのさし入れば
鮎およぎをり背はそぼそと
一つ星深山の杉に亦出でて

風さやきぬこほろぎの聲
じりじりと夕日のあかさまゆきて
蟬なきやみぬ風鈴の音

たからかに夕立雲のとび去りて
日頃愛せしダリヤ咲きけり

心地よく鳴く雀等と口笛を
吹きて遊べば春日しづめり

緑葉の中

澤 敏一

蠶室の桑の香は灯ともれる土間ににはへり風呂を沸く
かも。何よりも嬉しかりしはその花瓶に初めて花を生けし一
時。

無心にて木を刻み居るいぢらしき姿もしばし我に見ゆ

雲浮く。

氣弱さは母に似るよ此頃は貧しき母の思はるゝかな
つゝがなく母はおはせり日暮れて五燭のもとの夕食は
うれし。

雨風のすさまぢき土手に黒犬の濡れたる耳は大きかり
けり。

三日月の光を浴びて野の道を踊りて歸る男ありけり。
裏街の屋根の碧空午さがりそぞろあるけば秋よ来るら
し。(完)

「すがしき雨」

高祖保

陽射し浴びて夏木のもろ葉わくらはの皆しづかなり風
なきゆふべきひるまの砂に音なき通り雨晝顔の葉のふかみぞりかな

『秋ちかし』

きんいろの幣のごどしもあかどきを紅葉めきてぞ秋陽
さする

近し秋あきは近めり日毎くにひまの通ひ路ひと涼し

かも 大河の河面にうすれのこる陽のさゝ光りぬち小波の立
つ(河口所見)

蟲しげくすだく屋臺のゆふ風に打水の冷にこもらひに
暮れ近くさ庭の面に散る鳥の羽ほの寒うゆふづきにけ
り 川べりは日毎に蘆の繁らひてざんざら眞菰に風おつタ
ベ ほろほろこ木兎の宵を鳴くひまを枇杷の葉洩るゝ暮れ
のこる空

栗の花散れる真うへをさむぐと此の夜のくだら星か
夕近し眞裏の大樹梅熟れて暮れのこる日にあかくて
見ゆ

けり。

白く光る夏の夜月を幾度も秋の月より好しと思へり。
二ツ三ツ自轉車の鈴の參りたるこの朝あけに村を吹く
風。此の年も杜鵑の聲聞かずしてはや八月にも入りにける
かな。

旅して

夕立の晴れし後の青空にはつちり着ける停車場の灯よ
文書けばインクの色の速かに乾き行くかな夏の日のた
び。

京の街をあるき廻りて洋館の大いなる建てるに泣され
しかな。

『私』

今日一日烟に過しぬ日暮れぬつと腰のばして遠きを見
やる。

乾草の香や冷め夕焼の雲は大空にたなびきにけり。
我鍼を握る手先に蜻蛉來て遊びて歸る夏の夕ぐれ。
おぼろげな我と言ふ存在を思ひつゝ星夜を一人さまよ
ひ歩く。

夏の朝を村の道行きてふりかへれば碧空に一つ黄なる

げ散れる
山門のかたへの尾花かれ尾花うす日かげゆれ夕さりに
けり

『さみしさよ』

さやかには落ち込むものが秋の陽の日ざしは寒うゆれ
つ、見ゆも
朝なさなさ庭べに愛づとりぐの色持つ小さき松葉牡
丹よ
このひと日事なく過ぐれば過ぐることにまた寥しさの
おもほゆるかな
秋ちかし山の尾のへにかよふ音の風ならずかも浪のこ
になる
枇杷の枝の夜々にさむしも秋近ければ下草の土に雨こ
もらひて

——日誌の端から——

無題集

中用英一

濱に咲く月見草手折りて歸る僧湖上に淡き三日月の宵
葉がくれにひそめる紫紺の桑の實をひねもす子等は取
りにけるかな
渚にて餌をば拾ふ小鳥をりやがて鳴きつ、沖へ飛びけ

風呂滴く冷にて落つ音蟲もなく時計止る夜の留守居さ
びしも
夕立のはれて明るき公園に檻の小猿はうれしげになく
すくすくとのびし淡竹の竹の皮音なく落ちるま晝の静
けさ
紫の露うちこめし夕まぐれ白帆た、みて舟かへる見
ゆ
うなかぶすす・きふみわけ聞あぐるものふ多し城跡
の撮影
繭つむぐ車の音は雨の夜にいまだ止まさりこほろぎの
鳴く
秋の陽は山の端近く曇り日の沼うら冷にてかいつぶり
鳴く
野良犬は又漁りに來しか裏畑に音する夜更けの月は汎
なけり

水沫 なほ

茶木伊三郎

櫓からざぶんと飛べば水沫ちる

肌に涼しき青海の潮

かもめ

俳句



大正十四年

松宮誠一

牛牛の尾や追へご拂へご蠅は蠅

一三一

桑の實を取りに行きしか今日もまた子等の指皆むらさ
き色なり

京都にて去年求め來し白さつき鉢一杯に繁みて花咲く
橋下に網打つ人ありうす灯かげ囁く聲す雨降る中に
ぬくみ行く沼の水のをちこちに蛙鳴き初むおぼろ月夜
五月雨の晴れ間に出て打ち見れば梅はほの紅う色づ
きにけり

菜種刈りつ不圖目上ぐれば野末の空に夏らしき雲ひろ
これの日

水々じ柳の影の濠ばたを行く白きすがたの涼し氣に見
ゆ
暖き小春び受けて子供等はまゝごと遊びす山のくぼみ
に
小春日や山のくぼみの枯れ草にまろぶ手もとにたんぱ
、の咲く

白波の寄せてくだくる磯濱に
遊ぶ子供等かもめとぶ見ゆ

月見る

夜はふけて靜かなること海のごと
縁に出づれば月はほゝむ。

童謡 時間は大切

時ほど大切世にはなし、

一時一分一秒と、
時間のたつに従つて、二度と歸らん時はなし
四季のたつのも時間なり、時間正しく守らうよ
正しく守つて勵もうよ。

牛病むで家一層の暗さかな
牛曳いて桃の道行く見ゆるなり
牛賣つて後三人の日暮かな
天晴や雪打ち拂ひ立つ筮葉

思ふ儘空翔るかや風
風霞んで空の廣さかな

よき御代や初日静々と明くるなり
軸かかへ隠居出で来る福壽草

福壽草南天の庭に向ひけり
春雨や合羽新たなる人の往く

日に醉ひて雲雀落ちけり麥の浪

聲のみの雲雀や里の歸り道

粟烟風吹くまゝに釣案山子

洲白う浮き出て夕の涼みかな
岩蔭の蟹泡をふく夏の月

夕立や筑波の連山雲の中

災天に砂ふんで河原渡るなり
清水洩る岩見付けたり夏の旅

軍馬嘶いて冴ゆ陣の月

鳥一羽飛んで裾野の暮れんとす

夏 春

紅葉照る満山に響く寺の鐘
星なくて雪模様なり町に入る

干してある桶の氷未だ解けやらす
足袋をはく手先寒さや霜の朝

初雪のとけ流るるや桶の音

一四、九、二〇

夕立 木村謙次

夕立や港に急ぐ船のあり。
夕立に走る堤の長さかな。

夕立の晴れて蟬鳴ぐ夕陽かな。
夕立の片空晴れて降りにけり。

蟬

殻を出て蟬の生るゝ庭くらし。
雨止みて蟬の真晝となりにけり

神苑の樹々の深さや蟬の聲。

夕立 大西 渡

夕立のふりしきる中を乞食一人
夏の夕

秋

暗がりに夜がらす一羽鳴きにけり
初秋

氷屋の看板のかげひそめけり
秋の雨

雨降りて干物取る間に陽がてらす

二百十日

危日も無事なりし百姓の顔

故郷 北村彌一郎

川柳 田中準一

天賞を取つたが試験落第し

月 西澤新藏

静かなる人ばかりなり月見かな。
邪魔となり景色となる月の雲。
月今宵座敷の雨戸締めおしむ。
夕日さす池に紅葉の浮びけり。
豊年や芝居賑ふ田舎道。

今日もまた

小菅新之丞

夕立のそれで明るき西の窓

濱に来て爲まで赤き入日かな

夏期雑句

大橋富造

男子の節句雄々しくあるかな

夏の日居長英三郎

鐘汎にて朝日さんくと昇りけり。

田に出で、

朝日射して我影長き青田哉。

狂ふく嵐に明けし林かな。

うつとりと巡禮の鈴の遠ざかる。

朝の道に啖はく乙女胸やめる。

野道一人來て木蔭に文讀む人を見る。

蟬聲湧き出づしばし木の間に憩ふ時。

頭痛き日叢飛び出づ蝶一つ。

暑き日を黒き牛行く舌長う垂れ。

日さかりにはこりを立てゝ歸る兒等。

湖邊にて

砂にまろび兒等は砂投げ追ひ走る。

行水やばんおんとひゞく暮の鐘

夕日きらゝ蜻蛉の翅に映る返る。

夕日ま赤屋根に居る人照らしける。

蟬やしきり石碑の多き墓場かな。

山鳴りや荒れ海を見る山の家。
大海の荒れ音盡きて山靜む。
ひぐるまの伸びすぎて見ゆ真晝哉。
盆踊り歸りて月の峯に出で
今少しの所と桃取りの子勉むなり。
可愛さや大雲の動きみる籠の子童。
松原の陽炎に帆船動く哉。
宿なしの犬歩き行く月夜かな。
寒月に瘦せ犬の影細きかな。
のをれんを分ければ湯屋の香り哉。
巣つくらふ蜂の入り來たる暮夏の空淡き。
涼風に秋らしくなる空の色。

和

歌

海原に雲動く影走るなり

廣に海かな動く影かな。

青空に泳ぐ大鯉口あけて

只風と浪の昔のみ吾一人。

二五五、九、二〇（完）



石塲が濱應援記ご余の感想

副團長

吉田謙成

波を蹴散し進み行く端艇渺茫漠漠たる波瀾の蕩搖、
曙光を受けて紫金の妙光を放つ海原。其の快や俗塵を
超脱す。陸上に於けるが如き魔性は人魂を去り、清淡
虚無直ちに自然の堂奥に入る、然りと雖も未だ艇上に
絶叫せざる者、恰も糖密の甘きを知らざる者の如し、
萬程の甘きは歯牙の政む所に依り得られ、水上の快は
雄大豪壯の波濤に乗り出す漕手にして初めて之を知る
可し。

八月二日。絶好の端艇日和、朝六時二十四分氣笛一聲
快晴の稻枝が空に煤煙を残し、蜿蜒たる列車は軌道を
西に走る、我れ車窓に凭る事約一時間にして大津驛に

可切る、第一航路……彦中第二選手

第二航路……米子第二選手

敵米子中學は日本海上に多年腕を磨ける猛者なり、決
して侮る可からず。然りと雖も我も亦天下の琵琶湖に

枝を練りしもの豈に容易に勝を譲らんや。兩艇飛ぶが如し、二百四百六百、力漕は愈々自熱す。流石は覇者の争、未だ勝敗を決せず。「頑張れ!! 頑張れ!!」聲援亦自熱す。彼我並行して九百に入る「ラストヘビ!!!」の絶叫と共に、兩艇の争ふ事蚊龍の玉を争ふが如く、水煙高く、觀衆をして掌中汗を握らしめ應援をしてます。

熱狂せしむ、號砲一發勝敗決す。痛恨なり、無念なり、米子の勝報を見る、余輩副團長の職を汚し、有名無實何等應援指導に効果の現はれざるを深く遺憾とし團員諸兄に恥づる所以なり。最後に余の感想を述べて諸君の是正を乞はん、本大會に於て第一選手の棄權したるを吾人は深く憾む。

本年の第一選手の責任は度重なる慘敗の雪辱戦に非ずや何故に第一選手は此の大責任を忘却して棄權せしか吾人をして言はしむれば如何なる理由ありとも彼等は一校を代表する選手なれば、いやしくも過去の歴史を冒瀆せざる責任あり、狂瀾を既倒に廻すべき大責任あり。此等の大責任あるを省みずして棄權せる彼等の責任を問はざるを得ず、小事に我意を立て、大責任を忘れたる彼等を憾む。

次に吾人は應援團員の自覺を望む。大津石塲が濱の應援團員僅かに數名に過ぎざりき、而も其の大部分は幹部の人々なりき。有志の應援とは云へかく團員の冷澹なるを以てしては當底選手を慰安激励すること能はざるを思ふ。

石をも熔かす炎天の下に猛練習をつゞくる選手は我等六百名の代表者なり否或る一面よりすれば犠牲者なり各部選手諸兄の活躍の如何に依り一校の社界的位置に大影響あること毫も學業成績の校名に影響あるにことならず。而して運動部選手の努力により克ち得たる校名の天下に轟くは吾人六百の生徒の名譽にほかならず換言すれば一校を代表する選手は全校生徒を代表して校名を輝やかさんと努力する者なり、云はば我等の犠牲者なり、此の犠牲者に對して感謝し同情するは吾人當然の義務なりとす。然るに現今應援團員の選手に對する冷澹なる全く驚くの外なし、これ余輩の深く恨む所なり乞ふ團員諸君諸君は自治の精神に基き自ら進んで選手を勵まし且つ慰め飽くまで選手に對して同情の念を以てせよ。吾人は自覺せる眞の應援團の產る日の一日も速かならん事を祈つて茲に擋筆するものなり



部 報

學藝品展覽會

(大正十三年度)

學藝品展覽會	
大正十四年三月五日學藝品展覽會を開いた。矢張り	
今年も習字、圖畫が其數に於て首位を占め、他は僅に	
英習字及發明圖が一、二點しか無かつたのは大いに遺憾である。杉江、丹羽兩先生の審査を請ひ等級による	
受賞者は左の通りである。	
圖 畫 之 部	
優等	村上 正和
一等	天方 健一 堀江 耕次 竹中 正
二等	青山庄之進 橋詰與惣次郎 木村 六郎
中川 正作 尾本 市平 井口 良雄	
習字之部	
三等 不明 文章之部	
英習字之部	

三等 中居 忠一
物理圖表

三等 不 明

(大正十四年度)

部長	五年	山本	教諭
理事	同	内藤	信夫
四年	山本	捨三	
同	三和	普	
三年	大久保	真順	
同	東	清哲	

序

本年も亦我部は山本先生を部長と仰ぎ我等六名の理事が微力を盡す事となりました。部の向上發展は我等のひとしく望む所であります。只僅かな後援者のみでは到底不可能な事であります。これは諸君の自發心と部長の熱心な指導及び理事の努力によつて始めて出来る事と思ひます。我々も大いに考慮すると共に、諸君も此の邊をよく理解されて熱誠なる御援助あらんことを切に希望します。

五月二十六日九時三十分より春季學藝大會を開催す
第一回 開會之辭 理事 内藤 信夫
拍手裡に登壇。内容あり底力あり雄辯を以て聽衆の理解を促し場内緊張すと見るや言を結び本會の幕を切つて落す。

第二回 先づ國難について自覺せよ 三乙 奥村一男
我が國の現狀は輸入超過に加ふるに排日思想海外におこり。内憂又外患あゝ危い哉日本。我が國の名譽を世界に輝かす義務は皆吾人の雙肩にかかるれり。自重せよ。

第三回 清正の槍 一乙 藤野 知三
平安城槍造りの長吉と清正の話。元氣あり熱もあつたが時々目をつむつて話したのは欠點である。

第四回 バビロン落成ゾビラスの智勇 二甲 池田文中
ベルシャ王ダリュースの歴史を以て萬事は一心によつて成ると結ぶ。聲と目とに注意を望む。

第五回 覚醒を促す 一丙 木村 三雄
現今日本の實に危機に頻してゐます。身の爲め家のため、國のために彦中の諸君よ醒めて下させよ。

第十二回 本妙寺の惡小僧より總理大臣 三甲 東清哲
世間では何事でも運一つでさまるかの様に思ひ、しかも運は自然に來るかの様に考へてゐる人はまことに間違ひきつてゐる。運は自分自身で聞くものである。

第十三回 勉強は成功の母 一乙 鈴木 勳
眞面目で辯舌もよかつた態度もよかつた。
述べ聽衆をやんやと云はせた。

第十四回 白虎隊 三甲 河村三知雄
聲よく通らすして不明瞭であつたのは遺憾である

第十五回 功名心 一乙 津田元治郎
早口で内容が不徹底。又原稿をあまり見ぬ方が聞き手を引きつけるだらう。

第十六回 自然の魅力 三乙 澤 敏一
態度は良かつたが語が單調できくにしかつた。

第十七回 詩の生活 五丙 寺村新太郎
保守にのみよらんとするものは死滅なり。自由の中に生ずる自我の生涯開放されたる世界は進歩なり。

自我の生涯、自由、開放の世界には詩あり。宇宙の真理をつかむ眞理あり。と内容あり聽衆を引きつける力

い。小さい唇からもれ出る一言一句は熱と誠意とに満ち、態度よく前途有望の小雄辯家熱辯家である。

第六回 隠れたる力 三丙 居長英三郎

四十七士の義舉にひそむ天川屋義平。乃木大將に力ある吉田松陰。隠れたる力それは偉人偉業或は醜事あらゆる事のかけにひそんでゐる。吾々は之をよく發見し理解して、人類社會のために、つくさねばならぬ。

第七回 大義名分を明かに 四丙 栗田 春雄

非人道的な戰争は今や失せやうとしてゐる。今後におこるべき戦——それは平和の戦だ。之に勝たんと欲せば大義名分を明かにせよ。

第八回 或る繪師の話 一甲 澤田 修二

元氣が少なかつたのは殘念である。

第九回 銀貨と聖典 二丙 上野 正

サイライスなど外三人が賞を受けるとき三人は銀貨サ

イライスは聖典をもらふと云ふ話。

第十回 理想の實現 一甲 茶木伊三郎
要は教育勅語を奉体して理想を實現せよ。

第十五回 やんちやの安兵衛 一甲 中居 林二
折りがわるくて折角の良材も不徹底に終つた。

ありき。

第十八回 妙人團平

一乙 大森 佑次

滑稽だが原稿を見すぎたのは惜しい。

第十九回 野球の選手として 二甲 前川 修

意味内容不徹底。

第二十回 ダニールの忍耐

二丙 曾我 繁三

第廿一回 近頃の中學生

五乙 松宮 誠一

家庭教育不理解のため子供に及ぼす、中學生に及ぼす悪い影響を熱辯を以て説く。態度に落ち着きがある。

第二十二回 沈勇

一乙 細淵 正也

艇の沈没の状況を息苦しい中で遺書に認め生命を共にした佐久間艇長の話。

第二十三回 勉學は健康を基礎とす二丙 湯淺 誠也

人生第一の要件は健康状態を持続するにあつて、如何に學問必要なりと雖も、それは第二位である。而して爲すべき時機は青年時代なり。諸君等若き青年よ、常に健康を保持して大いに勵めよ。

第二十四回 潜航艇と戦つた話 一丙 吉原 定藏

少し早口で明瞭を欠く。

第二十七回 勇氣の源泉 三乙 宗宮 復一

勇氣は社會の難局打破の機關である。その勇氣の源は徳である。

第二十八回 地球の中心に日章旗をたてんか 五乙 辻 孫四郎

登壇するや、聽衆の人氣の的となる。音聲明白に愛嬌ある態度で、我國の發展——海外發展について叫ぶ。

第二十九回 諸君の反省と奮闘とを望む 五甲 寺脇太治郎

現在の學生のかゆい所に手をふれて。眞面目な態度でこまこまと說いた。

第三十回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第一回 人間の價值幾何なるか 五乙 岩崎由太郎
人間は極めて自由な意思の有能者であると叫で、社會問題、勞働問題、選舉問題について説き簡単にして要を得てゐた。(現代人に自覺を要求した。)

第二回 品性について 四丙 庄田 芳夫
態度及び音聲よく、我々にとつて、善い教訓話である。

第三回 安心立命の境に達するには。

第四回 人間の價值幾何なるか 五乙 岩崎由太郎
人間は極めて自由な意思の有能者であると叫で、社會問題、勞働問題、選舉問題について説き簡単にして要を得てゐた。(現代人に自覺を要求した。)

第五回 品性について 四丙 庄田 芳夫
態度及び音聲よく、我々にとつて、善い教訓話である。

第六回 安心立命の境に達するには。
第五回 安心立命の境に達するには。

第七回 閉會の辭 理事 大谷 義雄
學問は人間に安心を與へず。學問は世の中の疑をとき道徳は吾人の罪惡を知らしめ娛樂慰安は萬事を忘れるのみ。夫れ宗教は萬人に安心をあたふ。宗教的信仰によつて始めて安心立命の境に達し得る。蓋し本日第一の熱辯なり。

第八回 閉會の辭 理事 大谷 義雄
終了後辯士會合して諸先生の批評をうけて散會せり

本年度第二回學藝會は、十月九日午前十一時より開かれた。當日は他校辯士數名の出演があつた。

一、開會之辭

理事 大谷 義雄

第二回學藝大會之記

六、加藤首相

二丙 三木 源一

七、貧苦の原因 一乙 藤野 知三

第廿五回 聖德太子 二乙 尾本 市平

第廿六回 意義ある人生生活 四丙 須山清太郎

意義ある生活、それは智と情との合一せる生活、徹底的に合一せる生活である。と、壇上に叫ぶ聲或は鋭く或は弱く、時には高く時には低く、一言をはいては緊張を興へ、一節説いては理解を促す雄辯は眞に本日に於ける花と云ふべきである。將來益々發展せられた。

第廿七回 勇氣の源泉 三乙 宗宮 復一

勇氣は社會の難局打破の機關である。その勇氣の源は徳である。

第廿八回 地球の中心に日章旗をたてんか 五乙 辻 孫四郎

登壇するや、聽衆の人氣の的となる。音聲明白に愛嬌ある態度で、我國の發展——海外發展について叫ぶ。

第廿九回 諸君の反省と奮闘とを望む 五甲 寺脇太治郎

現在の學生のかゆい所に手をふれて。眞面目な態度でこまこまと說いた。

第三十回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第三十一回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第三十二回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第三十三回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第三十四回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第三十五回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第三十六回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第三十七回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第三十八回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第三十九回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第四十回 二重生活 二甲 多賀 啓照

元氣あり、態度も良かつた。

第四十五回 二重生活 二甲 多賀 啓照

音聲良。草稿に頼り過ぎた。が、前途有望である。
八、勇敢なる機關手 一甲 廣瀬 芳樹
態度、口調、共に良かつた。今少し度胸を望む。

九、彼も人なり、吾も人なり 三丙 武田 寛了
落着あり。音調、口調、良し。
十、獨艦エムデン號の奮戦 一乙 岡庭 博
僅か三千餘噸の商船「エムデン」號が、聯合軍の船艦
五十餘隻を擊沈した話。

十一、向上 五乙 尾本 信藏
人生は向上に始まりて向上に終る。而して、趣味は
人生に缺くべからざると共に、吾人は其の高尚なる趣
味を味はふ事によつて、人格を向上せしめ得べし、と
獨特の演説口調で、流暢に出來たが、元氣無く、熱の
足りなかつたのは遺憾である。

十二、新聞配達から出世した横田司法大臣 一甲 杉山 勝一
十三、點取りむし 三丙 居長英三郎
世に守銭奴あるが如く、吾人の間には、點取りむし
が存在するのである。之、素より排すべきであるが、
併し、吾々は未だ「點取りむし」の境地まで進んで居
ばならぬ、と。

旨の徹底しない點のあつたのは遺憾である。
十九、自己を知れ 一乙 鈴木 動
京の蛙、大阪の蛙は、何れも自分の眼が、後に着いて居るのを知らなかつた。同様に、吾人が世の大潮に乗り出さんとするには、先づ、自己を十分知らなければならぬ、と。

二十、Application and Perseverance.

5. a. S. Ohortory

二十一、世相考察の一方面 五乙 川崎 一郎
世には總て、表あれば裏あり、上あれば下ある事を説く。態度に落着きあり。辯亦、明瞭。蓋し本日の優秀なる辯論の一つであつた。

二十二、反抗せよ死の最後まで 五丙 吉田諦誠
始め諸外國の我が國に對する態度を論じ、中途より論題を變じて、軍事施設に關する意見を述べ、最後に彦中赤鬼魂の振起を促す。勇氣あり、且、語調にも重みある辯論であつた、が半ば頃稍々脱線し、論旨が一貫して居らなかつたので、折角の熱辯を稍々傷つけたのは甚だ遺憾である。

二十三、吾人青年の覺悟 彥根商業 佐野伊助君

ない。目下の吾等は、先づ其の境地に到達する事に力めなければならぬ、と。語調に力あり、思ふ所を遺憾なく述べた。

十五、井伊大老を懷ふ 五乙 松宮 誠一
大老を救ひて、非命に死したる、彼の大偉人、井伊

國難を救ひて、以て、金龜城下に生ひ立つ彦中健兒の奮起を促す。あくまでも沈着なる態度、且、洗練を重ねたる雄辯に、聽衆も全く魅せられた。

十六、繪を描いて 三乙 東 清哲
東君得意の巧妙な話振りに、一同、腹の皮を撓らした。

十七、世は逆轉せず 二甲 西川源一郎
世人動もすれば、「世は逆轉せり」と言ふが、その様な事を云ふ人の頭が、逆轉して居るのであつて、日月の天に懸る限り、世は決して逆轉せず、と。今少し話方に研究の餘地があらうと思はれた。

十八、俺等の天地は眞闇だ 五甲 二橋 五男
我が國の現狀、又將來を見るとき、吾々は一點の光明をも認め得ない。と、餘りに元氣溢れて、十分に論

時に三時。此所に本年度、辯論大會最後の幕を閉じ只、始終緊張味を缺ける聽衆の態度を深く遺憾とし、敢て附記して、六百の健兒の猛省を促す。

閉會後、辯士の茶話會を開き、諸先生から一々御親切なる批評を賜つた。

學藝大會受賞者

赤銅牌	松 宮 誠 一
同	川 崎 一 郎
銅牌	須 山 清太郎
木	村 三 雄

右は春秋兩度の學藝大會成績審査の結果優秀者と認め
て賞牌を授與し

赤銅牌 吉田諦成

右は既往五ヶ年間毎回學藝大會に出演せざることなく